

一般社団法人 磊ノ島らい

一〇年後も

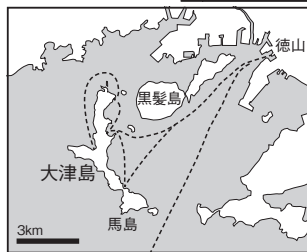
島に住み続けるために

一般社団法人磊ノ島代表理事 渡邊 あゆ子

「祝、限界集落二〇周年！」

島のおじいちゃんの言葉です。大津島が限界集落と言われて二〇年以上になるそうですが、その間も踏ん張ってきたという、長年島を支え続けてきた人ならではの気概を表わす言葉で、私は気に入っています。一方、「一〇年後、島の人口は一〇〇人を切るそうだ」「四〇人くらいになるという話もあるぞ」という声もこの数年の間に、頻繁に聞かれるようになりました。

今回は、私が代表を務める一般社団法人磊ノ島が大津島に立ち上がったいきさつと、現在の島の状況についてお伝えします。



おおつしま
大津島：徳山の南西約10km沖合にある細長い丘陵状の島。面積約4.73km²、周囲約20.9km、人口226人(令和元年8月末現在)。かつては2つの島だったが、400年ほど前に砂洲でつながった。太平洋戦争末期の特攻兵器・人間魚雷「回天」の訓練基地跡と記念館がある。

故郷に対する気持ちがUターンを機に変化

私が島に帰ってきて七年になりました。大学を卒業して漫画家になるため上京、その年末に出版社の新人賞を取りデビュー、以来三〇年以上漫画家として執筆活動をしてきました。しかし、東日本の震災以降、出版界の不況が深刻になり、その前から仕事が減っていたこともあって、決心して母の暮らす島に帰ることにしました。島でも漫画の仕事は続けていくつもりでしたが、何より心配なのは、島暮らしになじめるのだろうか、ということでした。

田舎の若者にありがちな考えですが、私は島が嫌いでした。たくさん虫、下水環境の悪さ、閉鎖的な人間関係、どれをとっても馴染めず、一刻も早く島から出て、大好きな漫画を描いて暮らしたいと、毎日考えていました。



ともに活動するメンバー（筆者は左端、右から2番目が島食堂「ひなた」の古城昭彦店長）。

ところが、Uターンして、島で久しぶりに暮らしてみると、昔のように嫌な気持ちはなくなっていました。小さくてエンジンの匂いが臭かった巡航船は美しいフェリーと高速艇になり、本土・徳山との往復は毎日七便。徳山港に着



平成16年に就航したフェリー新大津島。

くと、歩いて五分足らずで新幹線「のぞみ」が停まるJR徳山駅があります。以前、友人が東京から島に遊びに来た時には、新幹線のホームからすぐ目の前に港と海が見えて素敵なところだね、と褒めてくれ、とても嬉しかったのを覚えています。

島では、暮らしの中での会話量がとても多いと感じます。さらに仕事をしながら大津島地区コミュニティ推進協議会

（以下、コミュニティ）など地域活動のお手伝いをする事になると、その会話の量たるや、満員電車でぎゅうぎゅうに押されている感じでしょうか。嫌ではなく楽しいので、おしくらまんじゅうといったほうが近いです。埼玉にいた頃は、悪くすると一カ月以上も人と話さず、家に籠もって漫画を描くことも多かったので、その反動なのでしょう。

あれほど嫌いだった虫も、ムカデならヒバサミで掴めるようになったし、手のひら大のクモが出て、大音量の悲鳴をあげずに済むようになりました。

そんな風にして地域と関わりな

がら、島の人々や島外で島に関わる人々を知り、島の行事や歴史を知り、都会で得た知識とは別の、たくさんの事を教わってきました。そして改めてこの故郷が大好きになりました。

ところが、つい先日まで元気に話をしていたお年寄りが本土の施設に入所するなど、気づいてみると島の人口は急激に減っていました。一〇年後の暗い未来を考えずにはいられません。

私たちやこの島の未来は、このまま暗いものになってしまうのか。今の私たちに何かできないのか。そんな課題認識と危機意識を持って、島内外の関係者が動き出しました。

ここ五年間での新たな動き

今から五年前、当時の大津島支所の職員の方の熱心な後押しもあり、島の出身者たちで構成する「若潮の会」が誕生しました。島に生まれて、もう暮らすことはできないけれど大好きな故郷のために何かしたいという人たちです。私も発足当初から関わらせていただいています。

リーダーは大津島中学校バレー部の元キャプテン。島の伝統文化を伝授・伝承し、島の魅力の再発見につなげるというコンセプトのもと、コミュニティと協力し、文化祭や桜祭りなどイベントの手伝い、バレー部の伝統であるアイランドカップや島の再発見ツアー（遠足）の開催、サツマイモの栽培など、精力的な活動を続けており、島になくて

はならない存在になっています。島の住民を含め、現在会員は三五人です。

島側でも新たな動きがありました。コミュニティとしての「アイランダー」への参加です。島の若手数名が東京・池袋サンシャインシティに繰り出し、島のPRと移住促進のための活動を展開しています。当初は東京でPRしても島は遠すぎるし、移住促進の効果は期待できないと思っていました。しかし蓋を開けてみると、島に関心を示す方は意外に多い。移住となると話は別ですが、参加四回目には、開催中・開催後に複数件の問い合わせがあり、直接島に来られた方もいらっしゃいました。

今年の大津島への移住者は七人で、その半数以上が三十歳代の若者です。それまでの移住者は高齢の方がほとんどで、人数も少なかったことを考えると、移住者受け入れに向けて島内で準備を進めてきたことに一定の効果はあったのかもしれないと思います。

Ｉターンの若者に誘われて法人を設立

「法人をつくりませんか」

今から二年前、島から徳山港に向かう巡航船の中で、その前年に埼玉から島へ移住してきた青年に声をかけられました。現在、本法人の専務理事を務める松田翔剛君（しょうこう）です。移住して来るなり地域の草刈りや祭りに積極的に参加、彼はあつという間に地域に溶け込み人気者になっていました。

文化祭で「ああ回天」という舞踊を披露する時にも、快く参加を引き受けてくれ、厚化粧をして踊ってくれました。島に来る以前は、東京で空間デザイナーをしていたそうです。

「渡邊さんには法人の代表になってほしいんです。島のことも東京のことも知っている人が法人には必要なんです」

以来、船で出会う度にそう説得されました。東京といっても、めったに外出しなかった漫画家がどれほどのことを知っているのかわかりませんが、少なくとも、島のことはある程度は分かっていると思っています。

改めて話を聞いてみると、彼は島の一〇年後を暗い未来と捉えるのではなく、ずっとその先も島が明るく続く形でデザインしようとしていることが分かりました。その形はまだおぼろげで、頼りない部分もあるけれど、この島やここに住む人々が好きで、島を

良い形に変えて行きたいという思いに溢れていると感じました。

彼の熱意に応えようと私は法人の代表になることにしました。一〇年後の未来をデザインすることに私も加わりたいたと思っただけです。私も彼と同じ創造する立場の人間だからこそ、つくること、デザインすることを面白いと感じたのです。

「祝、限界集落二〇周年!」という冒頭の言葉がふつと浮かんできました。島を支えて来た人たちの、エールのように聞こえました。

そうして一年後の平成三〇年一月九日、島の活性化を目的として「一般社団法人磊ノ島」が立ち上がりました。

「磊」とは、石がゴロゴロしているさま、心の大きいさま(『デジタル大辞林』より)のことで、豪放磊落という言葉にあるように、古くは大正時代から採石作業に従事してきた島の人々の心の強さ、おおらかさを表しているのだと、命名した松田くんはいます。

磊ノ島は、島の中の組織(コミュニティ・若潮の会)との連携はさることながら、観光・行政・飲食業など島外の組織との



島北部の瀬戸浜にある大板城築城残石。大津島や北隣の黒髪島では御影石が産出する。

連携にも取り組みます。それによって、飲食・宿泊、商業、漁業、交通、観光の幅広い分野で事業を展開していく予定です。そのため、七名の理事のうち、三名は島外の人々が務めています。

まずは飲食事業に着手

事業の手始めとして、巡航船が発着する馬島港近くで島



馬島港近くにある島食堂「ひなた」。



スダイダイを使ったチキンカレー。



大津島地区コミュニティ推進協議会と周南料飲組合青年部が開発した地ビール「島麦酒 SUDAIDAI」。ラベルデザインは松田専務理事が担当。

食堂「ひなた」の経営を始めました。以前から使われなかった食堂の建物を市から借り受け、ゴールデンウィーク最中の平成三二年四月下旬にオープン。土日のみの営業で、メニューは島のスダイダイという柑橘からつくったジャムを入れたチキンカレー、島でかつて冠婚葬祭の際につくられていたぶっかつうどん、スダイダイのシロップを入れたスカッシュ。また、コミュニティと周南料飲組合青年部が共同で開発した地ビール「島麦酒 SUDAIDAI」も取り扱っており、いずれも好評です。ちなみに「ひなた」と

いう屋号には自然と人々が集い、島らしいあたたかみのある賑やかなお店になってほしいという願いを込めています。今後は提供メニューを増やしたり、島内外のイベントへの出展、住民向けのお弁当販売などにも取り組みたいと考えています。

次に取り組んだ柑橘ブランドプロジェクトも現在進行中の事業です。スタイダイを中心にした商品展開で、スタイダイジャムと、それを隠し味にしたカレーを商品化すべく検討を重ねています。

ただし、事業展開には資金面で課題が残ります。現在は補助金と、住民の家を一軒ずつ回って出資いただいた寄付金、食堂の収入で賄っている状態ですが、今後はクラウドファンディングや銀行からの融資が必要だと考えています。

持続的な未来をつくるために活動を継続

メンバー同士で意見が食い違うことも少なくありません。島外の人たちは私たち島の住民が気づかなかった新しい視点から提案をしてくれるのですが、島内の事情もあり、なかなかそれを受け入れられないこともあります。事前に予想されたこととはいえ、戸惑うものなのです。

私はアップルパイが大好きです。このお菓子の美味しさは、外側のパイ生地と内側のリングの果肉との絶妙な隔て加減と食べた時の調和にあるのでしょう。本法人に関わってくれている島内外の方々も、こんな関係性になれたらと

思っています。その時にこそ、未来は明るい海の色のよう

に、透き通って見えてくるのかも知れません。「問題が起きてい

る」ということは、事業が動いているという事です。理事の一人のこの言葉にハッとさせられました。冒頭の言葉といい、時に私を励ましてくれる魔法の言葉があります。私が島を元気にするつもりが、島に元気づけられています。

喧嘩をしながらでもつくっていく法人は楽しい。こんな仲間との出会いをくれた島に感謝しながら、一〇年後の明るい未来をつくる努力をしようと思います。

「いろいろな会社を見て来ましたがね、資金がゼロって、初めてですよ」と、税理士の先生。

「とにかく続けることです。止めたらダメ。それがすべてです」

またいい言葉、もらいました。



渡邊あゆ子（わたなべ あゆこ）

昭和32年、天津島生まれ。漫画家、一般社団法人菰ノ島代表理事。大学を卒業後上京、小学館の新人漫画賞佳作入選後、同社の雑誌で漫画家としてデビュー。天津島にUターンした現在も法人の活動のかたわら、執筆活動を継続中。猫が大好き。